

幼稚園教育実習評価と自己評価の比較

—— 本学幼児教育科学生の場合 ——

大塚 健 樹

問題と目的

1 本研究の経緯

幼稚園教育実習における評価の内容を示す評価表については、本学においてもこれまでいくつかの改善がなされ、今に至っている。特に、教育実習の単位が事前・事後指導を含めて5単位になった平成2年には教育実習を行う時期の検討もなされ、2年次の前期と後期の2期に分けて行われていた教育実習が、1年次の後期に1週間（4日ないし5日）、2年次の前期に3週間にと変更になったことを受け、評価表も同一のものを使用していたものから別々なもの、そして評価項目の内容も変更された。その際の変更における評価項目の作成過程は、他の養成校の評価表を参考にしながら、実習担当者のそれまでの経験を踏まえ、それぞれの実習の目的に照らし合わせて、という手順であった。その後、平成11年度まで大きな変更をせずにその時作成された評価表が使用されてきた。

しかし、安部（1986）の指摘にもみられるような「実習中の活動をより明確に正しく反映し、大学での教育活動に生かされ、また幼稚園と幼児について熟練した保育者の専門家としての目が、評価に生かされ取り入れられるような評価表の作成が望まれる。」という問題と照らし合わせた場合、評価項目の作成は、担当者の経験則に頼るだけでなく客観的な手法も取り入れて行われるべきである。

そこで大塚は、平成10年度に、「教育実習評価における園評価と自己評価における評価項目の再検討に関する因子論的研究」という課題で本学の研究助成を受けたことを機に、統計的手法を取り入れて評価項目の再検討を行う予定で

あった。しかしながらその後、岩手県の保育者養成校連絡協議会会議において平成11年度以降使用する実習評価表の見直しと統一が行われ、本学独自の実習評価表の作成が困難となった。

そこで、11年度から使用されることとなった評価表を今後継続して統計的手法を用いて分析し、当初の目的に照らし合わせながら、よりよい評価表の作成を目指して行くこととする。そして、その結果を岩手県保育者養成校連絡協議会に提言していきたい。

2 本研究の目的

教育実習期間中、学生は日々様々な指導を受け、その指導を指標としながら反省し、次の活動に活かすということを繰り返していると思われる。そして、実習中の活動が評価表により評価されることになる。評価の内容は、実習態度（礼儀、明朗さ、積極性、協調性）、実習内容（子どもとの関わり、子どもの理解、環境への配慮、計画の作成、衛生・安全、保育実践）、実習記録（記録の提出、記録の仕方、反省）という3つの大項目とそれぞれの下位項目及び総合評価で構成されている。これらの評価内容は、先の作成過程から大項目と下位項目の関係及び総合評価との関係が曖昧である。

また、評価は当然ながら評価する側の主観、すなわち実習園の実習生に期待する実習内容に左右されており、実習生がそれらの評価内容をどのように感じ取り実習を行ったかは反映されていない。しかし、大学で実習指導を行う場合、園側の評価は無論大切だが、学生個々がそれらの評価をどのように受け取り（いわゆる自己評価）次の実習（本学の場合幼稚園実習の後、保育実習に入る学生がほとんどである）や就職活動に活かすかも重要である。ただ単に評価し

て終わりというわけではないのである。そういう意味で、実際には、園からの評価が重要な比重を占めるものの、実習に対する日頃の取り組みも加味して単位が与えられているのであるが、実習そのものをどのように反省し活かそうとしているのかは今のところ加味されていない。

以上のような認識に立ち、本研究では、第一に評価項目の関連を園側の評価と自己評価を用いて検討することを、第二に園評価と自己評価の差異を検討することを目的とする。

これらのことにより、よりよい評価表の作成は無論のことであるが、それらを実際の学生指導に活かせるのではないかと考える。

方 法

1 調査

幼稚園側の評価表（資料参照）は、平成11年6月に行われた教育実習終了後7月に郵送にて回収されており、それを分析に用いた。実習生の自己評価は、実習終了後の事後指導の時間に実習評価表と同一のもので行い、それを同じく用いた。

2 分析方法

評価表の下位項目と総合評価は、とてもよい

から劣るまで5段階で評価されており、これを便宜上間隔尺度と考え、「とてもよい」を5、「よい」を4、「普通」を3、「やや劣る」を2、「劣る」を1と点数化し、統計処理による分析を行った。行った分析は、単純な集計と総合評価を従属変数とし下位項目を独立変数とした相関分析、及び因子分析、さらに園評価と自己評価のクロス集計による一致率の算出である。

結 果

1 評価内容における結果

表1に幼稚園側の実習評価と自己評価の平均値と標準偏差が示されている。幼稚園側実習評価の平均値の最低は、「衛生安全」の3.28、最高が「記録の提出」の3.91であった。一方学生の自己評価の最低は、「計画の作成」の2.81、最高は「記録の提出」の4.00であった。自己評価の方が平均値でみると比較的ばらつきが大きいようである。また、14項目中「協調性」「子どもとのかかわり」「環境への配慮」「衛生・安全」「記録の提出」の5項目が、幼稚園側の評価より自己評価の方で高い平均値を示しており、平均値で見ると限り学生による自己評価の方が園側評価より相対的に低いようである。

さらに、表2に示されている総合評価を従属

表1 幼稚園教育実習評価と自己評価の平均値と標準偏差

	評 価 項 目	幼稚園教育実習評価		学生の自己評価	
		平 均	S. D.	平 均	S. D.
実習態度	1. 礼儀	3.76	0.84	3.66	0.65
	2. 明朗さ	3.68	0.88	3.47	0.71
	3. 積極性	3.76	0.84	3.75	0.72
	4. 協調性	3.81	0.80	3.90	0.72
実習内容	5. 子どもとの関わり	3.80	0.80	3.93	0.80
	6. 子どもの理解	3.73	0.80	3.61	0.74
	7. 環境への配慮	3.46	0.74	3.60	0.78
	8. 計画の作成	3.33	0.82	2.81	0.77
	9. 衛生・安全	3.28	0.60	3.38	0.61
	10. 保育実践	3.36	0.72	3.00	0.60
実習記録	11. 記録の提出	3.91	0.96	4.00	0.98
	12. 記録の仕方	3.42	0.80	3.00	0.64
	13. 反省	3.60	0.72	3.54	0.67
	14. 総合評価	3.64	0.71	3.37	0.58

表2 総合評価との相関関係

評価項目		幼稚園評価	自己評価
実習態度	1. 礼儀	.696**	.319**
	2. 明朗さ	.659**	.422**
	3. 積極性	.770**	.514**
	4. 協調性	.677**	.406**
実習内容	5. 子どもとの関わり	.697**	.482**
	6. 子どもの理解	.729**	.480**
	7. 環境への配慮	.643**	.346**
	8. 計画の作成	.614**	.416**
	9. 衛生・安全	.637**	.325**
	10. 保育実践	.723**	.416**
実習記録	11. 記録の提出	.549**	.396**
	12. 記録の仕方	.655**	.548**
	13. 反省	.703**	.562**

** : $p < .01$

表3 自己評価におけるバリマックス回転後の因子不荷量

評価項目		F 1	F 2	F 3
実習態度	1. 礼儀			.7469
	2. 明朗さ	.6025		
	3. 積極性	.7674		
	4. 協調性			.5477
実習内容	5. 子どもとの関わり	.6631		
	6. 子どもの理解	.6561		
	7. 環境への配慮		.6613	
	8. 計画の作成		.6927	
	9. 衛生・安全		.5584	
	10. 保育実践		.6841	
実習記録	11. 記録の提出			.6332
	12. 記録の仕方		.4492	
	13. 反省			.4379
14. 総合評価		.6221		

変数とした下位項目との相関関係をみると、幼稚園側の評価及び自己評価とも全下位項目において、高い有意水準をもって相関関係にある。しかし、総じて幼稚園側の評価の方が高い相関係数を示しているようである。

そして、表3には、自己評価におけるバリマックス回転後の因子負荷量が示されている。幼稚園側の因子分析は、先の表2に示されてもいるように総合評価との相関が高い上、下位項目間同士の相関も高い有意水準を持って高いためバリマックス回転ができず、因子抽出が不可能であった。つまり、幼稚園教育実習に限っていえば園からの評価は、総合評価との相関が強く、

且つ評価項目間それぞれの結びつきが強いことから、極論すれば総合評価のみで評価ができるということになる。それに対して、学生の自己評価からは、3つの因子が抽出された。第1因子は、「積極性」で代表され、「明朗さ」「子どもとの関わり」「子ども理解」「総合評価」含まれる。第2因子は、「計画の作成」で代表され、「環境への配慮」「衛生・安全」「保育実践」「記録の仕方」が含まれる。第3因子は、「礼儀」で代表され、「協調性」「記録提出」「反省」が含まれる。自己評価の結果をみる限り、大項目と下位項目の関係は薄いものといえる。また、第1因子から、学生は自己の実習を総合的に評価する際、明るく、積極的に子どもと関わり、子どもを理解したかということを重視しているといえるのではないだろうか。

2 幼稚園評価と自己評価の比較

表4に、幼稚園側の実習評価と自己評価の一致率が、クロス集計を基にして集計され示されている。

自己評価の方が幼稚園側からの評価より低い評価項目で40パーセントを超えているものは、「計画の作成」と「保育実践」「記録の仕方」である。逆に自己評価の方が40パーセントを超えているものはなく、「環境への配慮」のみがほぼそれに近い項目である。また、40パーセントを超えて両者の評価が一致しているものは、「礼儀」「協調性」「子どもとの関わり」「衛生・安全」「保育実践」「総合評価」の6項目であった。これらのことから、本学の学生は、ほぼ園側の指導を謙虚に受け止めて、自己反省しているといえるのではないかとと思われる。

また、自己評価の方が幼稚園側の評価より高い項目で、10パーセント台なのが「計画の作成」「保育実践」「記録の仕方」「総合評価」であることから、学校では直接指導できない内容は、特に自信がないといえるのではないかとと思われる。その自信の無さが、自己評価の低さに現れているのではないだろうか。

考 察

以上の結果から、評価内容における大項目と下位項目の関係は、かなり実習担当者の経験則に裏打ちされて作成されたものであり、その経験則は、実は実習から戻ってきた学生の反省から導き出されているのではないかと推察される。しかし、その学生の反省について論理的な調査・分析がなされていないため、作成段階で下位項目と大項目の関係が曖昧となってしまったのではないかと思われる。また、極論ではあるが、幼稚園側から提出される評価表は、総合評価のみでも問題ではなく、むしろ、個々人の実習内容の問題点等を記述式で示された方が学生は自己反省しやすく、その後の実習や就職には役立つのではないかと思われる。なお、問題点等は、実習期間中にその都度あるいは反省会等で指摘を受けているものと思われる。また、評価表にも特記事項という自由記述式の欄が設けられており、活用もされている。しかし、実習担当者にはなかなかそうした具体的な問題点の内容が見えないのも現実であり、このあたりの改善が、実習評価を普段の指導に活かそうとした場合の課題となるとと思われる。

さらに、幼稚園評価と自己評価の比較の結果から、本学学生は、2年次の幼稚園教育実習に

限っていえば実践的な指導に自信を持っていないようである。特に、計画をするということにその傾向が強いことが伺える。これはある意味当然のことといえるが、指導面での改善努力も必要である。

今後の課題

本研究は、平成11年度の2年次に行われた幼稚園教育実習の評価に基づいて分析・考察が行われたが、本学のほとんどの学生は、1年次の幼稚園見学実習（後期10月の1週間）、施設における保育実習（後期11月から12月末までのいずれか10日間）を経て、2年次6月の幼稚園教育実習（3週間）を行い、その後保育所・園（7月末10日間）の実習、そして選択で保育所・園あるいは施設どちらかの保育実習（ほとんどが後期11月上旬の10日間）を経験することになる。それぞれの実習で使用される評価表は、一部の項目に違いはみられるが、ほとんど同じである。そうした現状を踏まえると、それぞれの実習評価を時系列的に検討することで、実習を通じて学生がどのように成長していくかを検討することができると思われる。実は、こうした検討を行うことが、実習における学生指導としては重要なことではないかと思われる。この点が、今後の研究課題の一つである。

表4 幼稚園教育実習評価と自己評価の一致率

(単位：%)

	評 価 項 目	幼稚園＞自己評価	幼稚園＝自己評価	幼稚園＜自己評価
実 習 態 度	1. 礼儀	32.9	41.6	25.4
	2. 明朗さ	39.3	39.3	21.4
	3. 積極性	32.4	35.8	31.8
	4. 協調性	26.0	41.0	32.9
実 習 内 容	5. 子どもとの関わり	24.9	42.8	32.4
	6. 子どもとの理解	35.3	38.2	26.6
	7. 環境への配慮	23.7	36.4	39.9
	8. 計画の作成	51.4	34.7	13.9
	9. 衛生・安全	23.1	44.5	32.4
	10. 保育実践	41.0	43.9	15.0
実 習 記 録	11. 記録の提出	27.2	37.6	35.3
	12. 記録の仕方	48.6	37.0	14.5
	13. 反省	32.9	38.7	28.3
	14. 総合評価	38.7	44.5	16.8

また、問題と目的のところでも述べたように、評価表の内容は平成11年度に統一したばかりなので早急に変更することは困難である。何年間かこうしたデータを積み重ね、時期をみてよりよい評価表に変更していく必要があると思われる。そのためにも、継続していくことが次なる今後の課題である。

引用文献

- 1) 安部一子 1986 生活学園短期大学紀要 9, 72.

参考文献

- 1) 梶田勲一 1983 教育評価 有斐閣
- 2) 高木廣文 1998 HALWINによるデータ解析 現代数学社

付記

本研究は、平成10年度盛岡大学短期大学部研究助成の交付を受けて行われたことを付記します。

資料

幼稚園
保育所

実習評価表

〔岩手県保育者養成校〕
〔連絡協議会統一様式〕

実 習 生	所属	盛岡大学短期大学部		実 習 園・ 所	園・所名	
	学科	幼児教育科	学年 組		園・所長氏名	印
	氏名	(番)			指導者氏名	印

期 間	年 月 日 () から	日間	出 勤	日	欠 勤	日	遅 刻	日	早 退	日
	年 月 日 () まで									

評価の項目		評価の観点	とよ てもい	よ い	普 通	やや 劣る	劣 る
実 習 態 度	1. 礼 儀	身だしなみが清潔で、人に対して言葉 使いや挨拶など礼儀正しく接したか	-----				
	2. 明朗さ	明るくハキハキしていて、好感を与え たか	-----				
	3. 積極性	まじめに積極的に実習したか	-----				
	4. 協調性	職員や他の実習生と協力的であったか	-----				
実 習 内 容	5. 子どもとの かかわり	遊びや活動をとおして子どもと進んで かかわりを持つことが出来たか	-----				
	6. 子どもの理解	子どもの中にとけこみ、積極的に理解 しようとする姿勢がみられたか	-----				
	7. 環境への配慮	保育に必要な環境を整備し、保育室内 の整頓や美化に努めたか	-----				
	8. 計画の作成	保育の計画や準備が適切であったか	-----				
	9. 衛生・安全	衛生・安全への配慮や対応が適切にな されたか	-----				
	10. 保育実践	望ましい保育活動が適切に実践された か	-----				
実 習 記 録	11. 記録の提出	提出期限をよく守ったか	-----				
	12. 記録の仕方	要点を的確に記録できたか	-----				
	13. 反 省	自分の実習を反省し、次の保育に生か したか	-----				
総 合 評 価		実習態度・内容・記録をもとに総合的 に評価して下さい	-----				
特 記 事 項 〔お気づきの点に ついてぜひお書 き下さい。〕							

- <お願い> 1 この評価表は、各項目ごとの観点から、5段階で評価し、該当する箇所に○印を記入して下さい。(実習しない項目については省いてよい。)
- 2 この評価表は、封書で、実習終了後1週間以内にお送り下さい。